

平成 27 年度 第 1 回高岡市総合教育会議 会議録

I 日時 平成 27 年 6 月 3 日 (水) 午後 3 時 00 分～午後 4 時 15 分

II 場所 高岡市役所 3 階 庁議室

III 出席者 高岡市長 高橋 正樹
高岡市教育委員会
教育委員長 河田 悦子
教育委員 山崎 隆志
教育委員 長谷田祐一
教育委員 森 美和
教育長 氷見 哲正

事務局関係

総務部

総務課長

廣瀬由美子

総務課副主幹

木村 文徳

福祉保健部

子ども・子育て課長

山田 晃

参事・健康増進課長

宮崎 晃一

教育委員会事務局

理事・教育次長

長井 一弘

総務課長

戸田龍太郎

教育次長・学校教育課長

阿尾 行将

生涯学習課長

笹島 永吉

教育次長・文化財課長

高田 克宏

参事・体育保健課長

橘 正規

参事・福岡教育行政センター所長

谷内 則之

総務課副主幹

島田 輝

IV 傍聴者 2 名

VI 協議の概要

1 開会

2 市長あいさつ

人づくりは、地方創生の大きな柱となるものである。また、産み育てやすい環境はまちの魅力の大きな要素であり、子どもの預かりをどう考えるかが大変重要である。

認定こども園のように、保育と教育が一体的に行われるようになった今、家庭や地域社会、学校、行政のさらなる連携と、子どもの24時間に対する向き合い方をしっかりと考えていかなければならない。

本市では、ものづくり・デザイン科のような独自のカリキュラムや、きずな子ども発達支援センターにおける福祉と教育が連携したきめ細かな発達支援などが行われており、これらは高岡の大きな特色であると思っている。

学校に対しては、子どもたち一人ひとりの個性や能力が輝くような教育を行ってほしいとかねてから思っており、就学前から就学後に至る連関・連携したシステムが必要と考えている。

こうしたことについて議論いただきながら、大綱というかたちにまとめ、教育委員会と市長部局のより一体的な連携を図りたいと考えており、忌憚のないご意見をいただきたい。

3 協議事項

(1) 高岡市総合教育会議の運営について

高岡市総合教育会議の開催趣旨や運営方法について、総務部総務課から説明した。出席者から質疑等はなく、会議の運営については、今後、高岡市総合教育会議運営要綱に基づき行うことについて了承された。

(2) 教育、学術及び文化の振興に関する総合的な施策の大綱について

教育委員会事務局から次のことについて説明した。

○高岡市教育大綱の策定方針

- ・総合計画との整合を図り、教育分野における上位計画に位置付ける。
- ・本市の教育、学術及び文化の振興に関する総合的な施策について、その目標や施策の根本となる方針を定める。本市の行政全体の中で、教育行政とそれ以外の行政分野の一層の連携を図るとともに、今日的な課題である地方創生への取り組みを念頭に置いた内容とする。
- ・基本理念、基本方針、重点施策により構成する。
- ・大綱に掲げる方針を新規事業として打ち出すため、新年度予算編成作業に間に合う年内の策定を目指す。

○高岡市の教育の成果と課題について

- ・平成26年度（平成25年度対象）教育委員会の事務の点検及び評価結果報告書について
- ・総合計画第2次基本計画の目標とする指標について

以上の説明の後、次のような意見交換があった。

〔教育長〕

子ども・子育て支援新制度の趣旨を踏まえ、就学前の子どもの教育・保育から小学校低学年の児童の教育への円滑なつながりを図ることが、子育て環境の一層の充実につながると考える。例えば発達障害支援の専門家が小学校や幼稚園・保育園の現場に入っていく、悩みを抱える保護者をサポートする。このような体制をしっかりと確立できるよう、教育委員会と福祉保健部の一層の連携に努めたい。

〔河田教育委員長〕

自分が拠って立つふるさとを信頼して誇りに思えることが、将来の生きる力の基礎になり、ひいては地方創生にもつながると考える。そのような環境が周りにあるかということ考えたとき、今、高岡で行われているものづくり・デザイン科や、地域の方々が協力して子どもたちをはぐくむ体制などは大変心強く、誇るべきことである。

〔市長〕

本市の誇るべきものを現状維持だけでなく、積極的に発掘、発見し、今ある素材を組み立てていく。そのことによって、子どもたち自身が地域の中での立ち位置を理解していってくれば、大変うれしいことである。

〔山崎教育委員〕

子どもたちが自立的に社会をつくりながら、その中で自分の役割を確認していくという意味で、部活動をはじめとするスポーツ・文化活動には大変重要な役割がある。その部分が年々痩せ細っているように思う。部活動では1校で維持できなくなり他校と合同チームを編成しているものも見受けられる一方で、クラブチームの活動が盛んになっている。しかし、学校を拠点としたコミュニティも重要な視点である。現代の様々な問題は、コミュニティ意識の希薄さが一因と考えており、スポーツや文化活動の核（コア）が地域に生まれるような仕組みを大綱に盛り込んでいただきたい。

〔市長〕

子どもたちが自分のやりたいことを実現でき、能力を伸ばすことができる適切な環境をどうつくるかであるが、子どもたちの能力の発現や指導者ということ

考えたときに、学校の中だけで完結しないという問題は確かにあり、大変悩ましい問題である。

〔長谷田教育委員〕

少子化を改善しなければ、あらゆることが立ち行かないという問題が現実としてある。多くの人に子どもを産んでもらえるように、ぜひとも女性が働きやすい環境、若い人たちが集まる環境をつくってほしい。また、最近は子どもの個性を生かすという傾向であり、勉強に限らずスポーツでも芸術でも、一人ひとりの能力、価値観に応じた教育が求められていると思う。

〔市長〕

地域を魅力あるものにして、地方創生につなげるためには、安心して子どもを育てられる環境があることを子育て世代に分かってもらうことが大事である。子どもの預かりということに関して言えば、預かる以上は、生活も含め何かを学んでもらうという感覚は必要である。保育や教育という壁を乗り越えたところに、これからの少子化対策、子育て支援の一つの道があると思う。

〔森教育委員〕

核家族化が進んだことで、母親が孤立し、偏った考えで子育てをしている傾向が強くなったと感じている。また、小中学生の段階で結果を早く求め過ぎて、子どもたちを小さくしているような気がする。もう少しゆとりをもって、子どもが自分で考えて行動することを親が見守る時間が必要だと思う。今は調べたいことがインターネットですぐに分かるが、外で発見して図鑑で調べるといった実体験こそが次へとつながるのであり、このような時間を家庭では大事にするべきだと思う。家庭教育の充実にもつながる大綱を目指してほしい。

〔市長〕

教育は学校の中だけで完結しているわけではなく、家庭にも連続している。このことを学校現場としてどのように意識するか、保護者にどのように伝えていくかということも学校には要求されているのだと思う。

〔市長〕

私としては、第一に学校は開かれていてほしい。地域社会にどのように評価されるかということ常を意識するという意味で、オープンにしておくということを普段からの心構えとしていただきたい。学校は地域社会や家庭と連続しており、子どもたちは、その連続した社会を歩き、家庭や地域に帰るということをもっと理解する必要がある。これを総じて言えば、学校のオープン化ということになる。

次に、子どもたちの能力を教育という場でどう花開かせるかということである。「学力」とは何か、「学力」で評価できることはどの程度かということなどを常に意識しなければならない。そういう意味で、ものづくり・デザイン科の検証、総括が必要と考えている。10年経って何が変わったかを検証し、どうあるべきか見直し、フィードバックする必要がある。

学校や教育委員会においても常に変化、変革ということを考えてほしい。例えば、タブレットをどう使うのか、あるいは使わないのか。時代の中で、今何を活用すべきなのかをぜひ考えていただきたい。

また、発達障害のある子どもなどへの教育は、できるだけ分離ではなく融合のかたちが望ましいと考えている。ある演劇家によれば、演劇はどの子にも役を与え、子どもの自己実現に効果があるということである。そのような子どもたちが興味をもち、能力を発揮できる分野で、キラリと光る目の輝きというものがあるはずである。その一瞬を見逃さない先生であってほしい。

本日は一方的に思いを述べるかたちとなったが、頂戴した意見を踏まえ、次回の会議では素案を示したい。

5 その他

今回は、9月初旬に開催することを確認した。

6 閉会